

甦った二五〇年前の

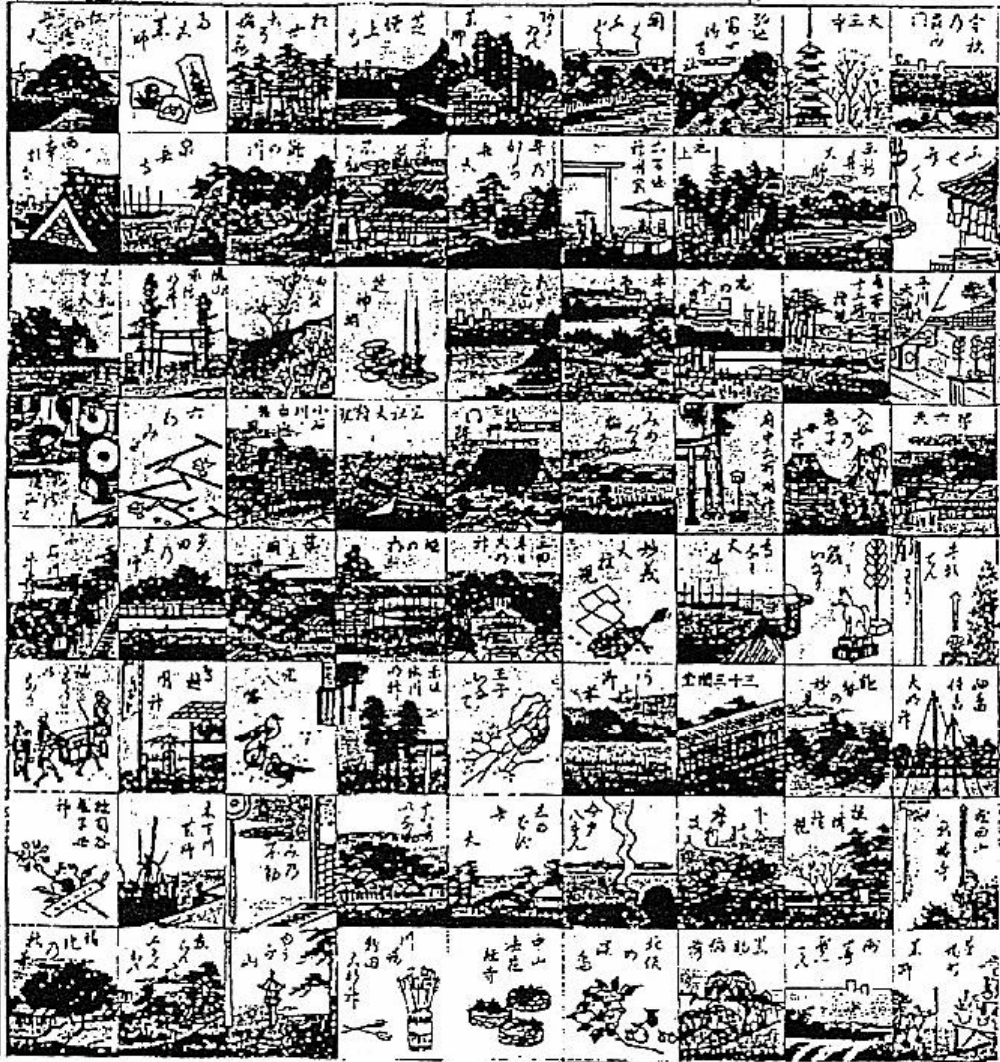
---

# 大相模不動尊の景観

越谷市郷土研究会

理事 高崎 力

# 神佛納手拭



江戸と近郊の主要な社寺

三代豊田・広重合作「神仏納手拭」

いわば江戸の人々に親しまれていた社寺の百選。江の島弁天・成田山新勝寺・妙義大権現など、泊りがけでなければ行けない場所も入っている。絵は風景が広重、名物が豊田の分担。納手拭とは神仏への奉納品で、願主の名を記して御手拭に。

平成11年 1月24日(日) PM 1:30  
千代田生命越谷営業所会議室

越谷市郷土研究会

一 不動坊の開基はいつ頃か（天平勝宝二年～天慶二年）

二 岩槻勢力下の不動坊（天正十一年～慶長二年）

三 家康 利根川を下る（慶長五年）

四 六供と御朱印高六十石の配分（寛永四年・享保六年・十年・寛政七年・文化六年・明治八年）

五 江戸湯島 靈雲寺の影響力（元禄四年・享保十四年）

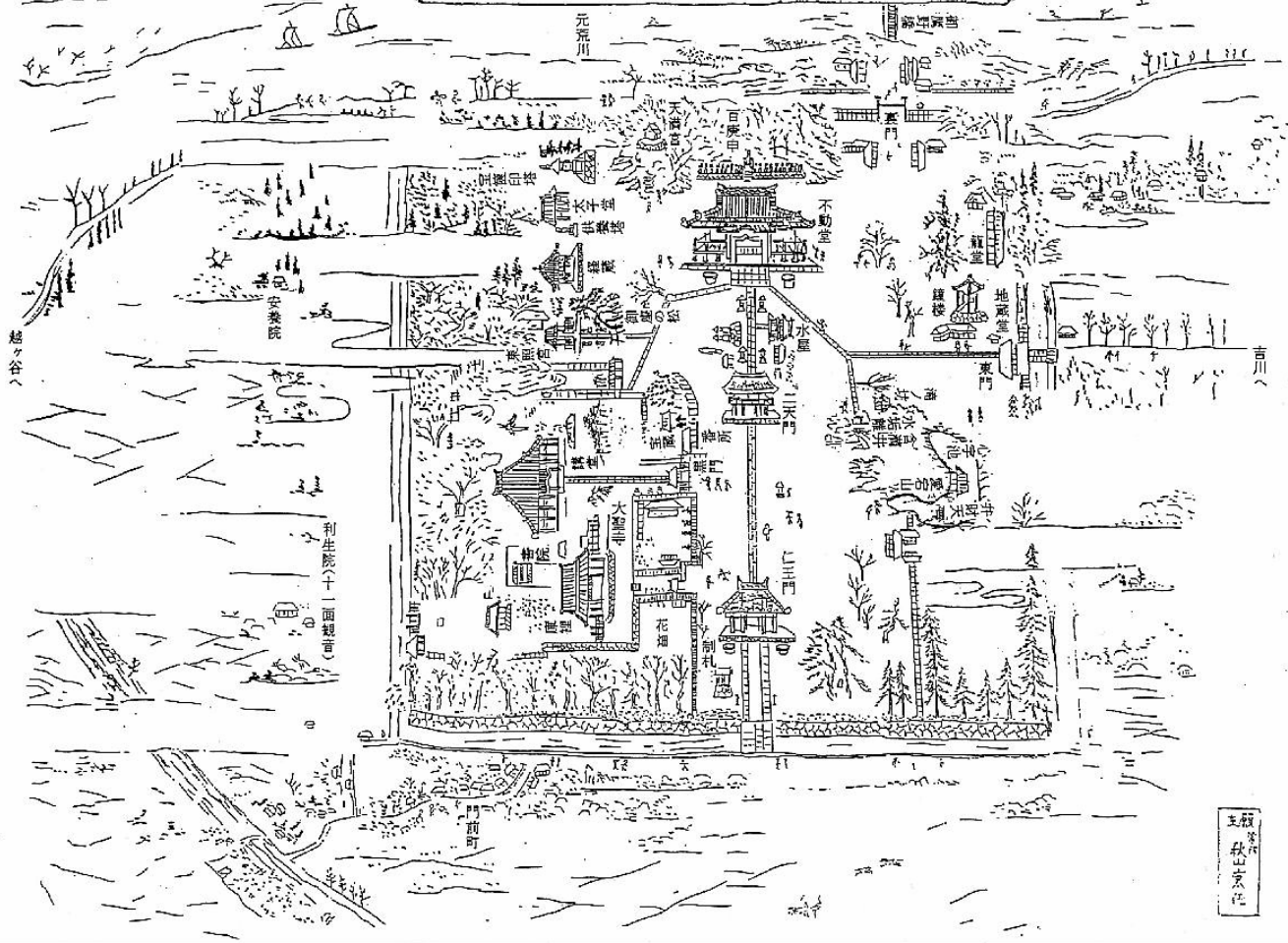
六 門前町の賑わい（寛保元年・文政八年・十二年・付図）

七 怪火巨剎を焼く（明治二十八年）

八 再建まで潰した関東大震災（明治二十九年～大正十四年）



武州大相模真大山大動尊全景圖



昭和二十九年発見した原図を書き写して縮小し建造物名等を記入し平成七年完成

作成者 高野力

武州大相模真大山大動尊

(四方大聖寺迄)

一相州大山不動尊良弁ノ作之事

或疑云、相州大山ハ良弁ヲ為ニ開祖ニ又云ニ良弁滝ニ等ノ旧迹アレトモ、不動明王ノ尊像ハ後代ニ鎌倉願行人ノ所作<sup>ニシテ</sup>而、良弁僧正ノ作ノ形像ト云ハ未ニ聞及ニ如何、答、今時彼山本堂ノ阿舎ノ銅像ハ実ニ願行人ノ作也、外ニ今古深ク秘シテ人之不能<sup>ニ</sup>見<sup>ル</sup>木像アリ、是則良弁僧正感見刻彫ノ靈像也、大山八大坊答ルニ湯嶋靈雲寺ニ書ニ□、当山不動尊願行人三人三作ハ常ニ本堂ニ安之、外ニ良弁僧正之作明王權現と申、拝見仕候者無御座候得共、縁起之面良弁初登之所坐神木放光之瑞を認、今之本堂之後ロニ槻樹にあり候故、殊其節石尊の降赴を感し、石尊の像全不動之尊形なる故、彼槻を立なから不動の形に刻ミ、功を畢さるに槻より血出候故造畢無之、是を封し神体と崇給ふ様ニ拝見申候、然故延喜式等時代迄ハ阿夫利神社と申、不動之地といたし候事ハ願行已後之事与奉存候、自余貴面可得御意候、恐惶謹言

八大坊開□(花押)

(享保十二年)  
六月十九日

靈雲寺大和上尊答

享保十二秋江戸開帳之刻、当山路縁起并 権現様御朱印ノ写及御奉納御太刀ノ親書、寺社御奉行所ニ差上ケ候、六月十八日御内寄御評議之上早速御聞濟ニテ、余寺ニ珍き御奉納物は別各段御立願之印、不動尊至極之御重宝ニ候、御大切ニ守護仕開帳本尊之側ニ箱之儘上ケ置、別段ニ懇望ノ者ニ斗為拝可申候、御朱印ト云御太刀ト云各段ノ御祈禱相勤候、本尊ト云彼是難有御鴻恩ニ奉存自今弥御祈禱不可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>怠慢<sup>一</sup>之旨被 仰渡候、

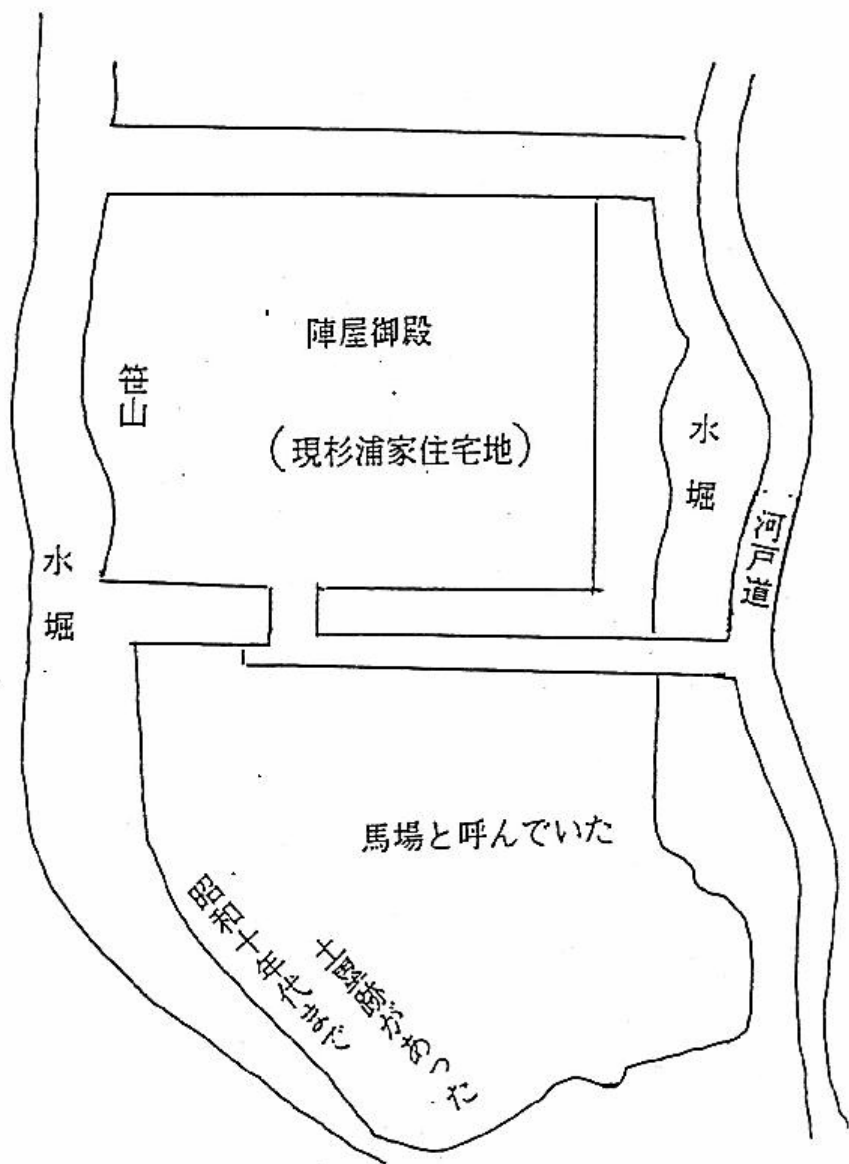
私云、六月十三日靈宝目錄并御太刀親書用意ニ致出府候、其朝俄ニ御太刀ノ寸法取候、長サ二尺七寸五分ト覚 公儀にも度長年中御寄附御太刀一揮長式尺七寸五分無銘ト書上ケ候、掃寺ノ後廿八日ニ吟味候得共、長サ式尺八寸五分ニ而候、愚衲出府之朝故急卒ニテ尺子ヲ巻寸見違候、然共書上ケ通ニ諸人ニモ申聞候、万一後代ニ寸法相調之義在<sup>レ</sup>之時ハ此趣能<sup>ク</sup>相心得可罷在候、長サ式尺八寸五分目釘穴式々処そリモ少在之候、元来ハ御持モ有<sup>レ</sup>之様ニモ申候得共、何時々白鞘ニ仕候哉、代々大切ニ相守とぞ置候故愚僧代ニも一度ぬかせ申候、

寛政二年 杉浦家由緒書控

慶長後年東照宮様奥州為御從討被為遊御出馬御船にて還御之砌拙者只今所持仕候武州松伏領大川戸村屋敷へ被為上  
此所に御殿御取立可被為遊旨勝林院様へ上意有之 御自筆にて御坪割 御殿之間敷御書付 勝林院様へ被為遊 御  
渡候に付近郷并秩父領より人足御呼寄老万人之到着にて御普請急に出来仕

# 慶長5年（1600）大川戸陣屋御殿

（元禄8年杉浦家屋敷書上図を原図とした）

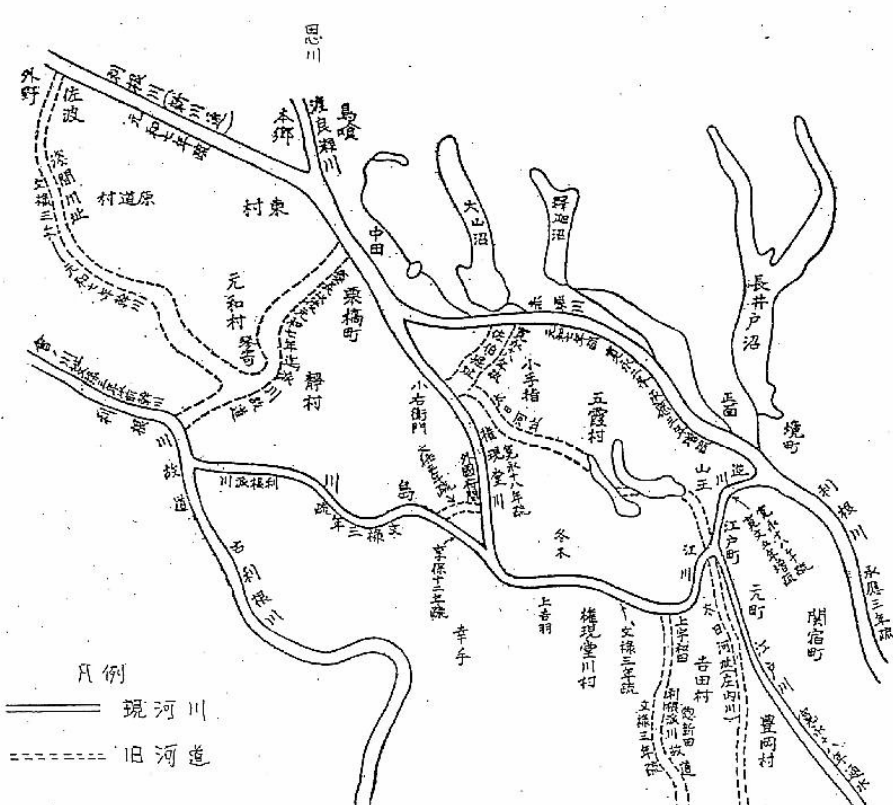


利根川治水史	原原良祐著
官界公論社刊	

東照宮御實紀附録卷九

利根川舟橋

小山より還御の折洪水にて。利根川の舟橋推流しければ。代官等かけ直さむかと伺ひし下。舟橋は全く舟橋に同く上り。諸軍の便よからしめん爲にかけしなり。上方へむかふには無用なれば改築に及ばずと仰有。小山と古河の間にある乙女川舟より御舟にめされ。西葛西につかせられ。江戸へ御歸城ありしかば。人々その迅速なるに感じ奉りしと云。(土談會稿、添徳集)



五霞村附近變流圖

凡例  
 ———— 鏡河川  
 - - - - - 旧河道





新編武蔵野土風俗卷之二百五 松毛郡之七



山王社 村の鎮守なり、別當光院本山修驗(葛修)等乎不動の權下なり、寛永元大社にて六供の儀ありと云、寛光院は御其一にて、餘の五寺は利生院・神王院・安樂寺・慈王寺・取音寺なり、利生院は今大聖寺の後頭にて、神王院は感方行にこれあり、○八幡社の行

不動堂 後地の略に、住吉良精僧住相州大山開闢の跡のあたりの根本を、不動の堂を稱し、其後傳を辨まんとて、先其木の根をも、大聖寺四山の僧不動堂といへる者、夢の俗に任せ、後儀を發出て當所に來りけるが、俄に反置くなりければ、是こそ有縁の地ならんとて、遂に當山に安樂せり、よりて山を廣大と號し、地を大相模と稱し、且其不動勢又不動院といひ、俗僧の學識針ならず、天正十八年東照宮御入闕あり、大聖寺の住僧交際といへるしの高徳たるより、御時依從かからず、同き十九年寺領六十石を賜はり、慶長五年下野小山田陣降参の向、當地へ渡御あり、鎌ヶ原御陣の御旗を懸られ、御太刀を納させりしが、御利達の目に當り、若しき高嶺ありければ、是より人の脚踏敷し、毎年正月九日には合式を興行すと見えたり、此儀さかんの項を説くれば、靈園に互れば取らず、本陣は辨の作は、一尺七寸許の立像なる由、松徳として、仁王門の外に寛政四年、二天門・神國・黒砂門、墓門の額をか、經堂、鎮座の標をか、東照宮御首を御神位と云、寛政六年御朱印を安置し、如願。

奉徳五  
東照権現宮 一寺  
東照権現御在昔日、寄高野於大聖寺、寺領六十石御寄附、是其由緒也、故之小僧辰夕欲奉安置尊容、無衣鉢之可捨因循、至于今寺于領御祈禱所、且今年征夷大將軍右大臣源家綱公、右御子孫繁昌之御願、以爲奉令修御願如左、  
延寶六戊午年六月十七日  
願主 知足院第十五世法印尊如

別當 大聖寺第九世法印 親如  
天神社 愛宕社 辨天社 秋葉社 太子堂 地蔵堂  
別當大聖寺 新開山僧宗、夜修驗御聖院の宗、成大山と號院に遷移せり、共 什賣 御太刀一丈九寸五分、長一尺八寸五分、唐頭一行良長納めし所など、塚頭 利生院本廿十一面、道照庵今廢、○安樂寺 大聖山と號す、天神社 三尊社、○經堂 本修驗、○稻荷社、○五輪社 本修驗以上の三寺は大聖寺、○知性院 本修驗の門院なり、八幡社、○金剛寺 本修、式台村御祖、稻荷社、○大徳寺 同、本修、式台村御祖、○不動堂 大聖寺、○圓隆堂 寺行、同、○觀音堂、○勢至堂

○西方村 神持所無由 西方村は大相模郷に屬す、古へは東方・見田方・當村を合て大相模郷と云ひしが、其後分郷のとき、當所は其郷中の西に當れるをもて、かく名付くこと、村内大聖寺不動の來山に、此郷の名源をのす、且當國七箇所興の系族八條・金重・温江氏の人多く此遊につとひ、今も村名にこれり、されば其系族にのせたる、大相模能高及び能高といへるは、當所に住し、在名を稱せしこと知るべし、かたゞ以舊地なることは論ずるに及ばず、江戸よりの行程五里餘、民家百六十、東は東方村、西は五ヶ塚村、南は登戸村、北は小林村に接せり、日光街道村の西界を貫り、東西十五町、南北十八町許、御入闕以來御料所なしとせ、寛文十一年村内を裂て萬年佐左衛門に賜はり、残りし所を延寶七年堀田筑前守に賜ひしが、元禄十一年又御料に復せり、よりて今御料と佐左衛門が知行なり、檢地は寛永四年東津角左衛門、鈴木藤兵衛亂れり、外に享保十六年、朋十八年の二度伊奈半左衛門、寛延二年吉田源之助、明和七年遠藤兵衛右衛門が檢地せし新田あり、當村の檢添なり、  
高杉村の中段  
小名 三谷組 藤塚組 田向組 西方組 松土手

高杉村の中段  
小名 三谷組 藤塚組 田向組 西方組 松土手

武州大相摸不動明王瑞像記

武州崎玉郡大相摸郷真大山者

阿遮之雲區瑜伽之淨場也舊有

寺志一卷其文纒十餘帛惜哉至

寛文中而泯焉曾讀古志者語曰

皆在南京良辨僧正神化無方闡

導獎利方到東國卜築相州大山

精修嚴勵于肯阿遮明王現形慰

略

享保第十回星次己酉仲秋之穀

武都寶林山靈雲精舎第三世

苾芻慧曠作文



小沙彌 光天 薰沐書

靈雲寺

〔寺名〕

東州市本郷區

湯島新花町に在り。寶林山佛日院(一に大悲心院)と號し、古義眞言宗に屬す。元禄四年十月淨嚴の創建に係り、當時將軍徳川綱吉より寺地三千五百坪、柳澤吉保より金三百兩等を寄捨せられ、牧野成貞亦梵鐘及び鐘樓を造り、淨嚴自ら其の銘を撰す。明年六月大元帥法を始修し、爾後恆例となし、六年十一月多摩郡上關師莊來印百石を給せらる。

眞言律宗

新安流の根本道場で、元禄七年關東眞言律宗惣本寺職を命じられる。

元と灌頂

堂、地藏堂、大元堂、方丈、庫裡、書院、學寮、鐘樓、經藏、門三宇、藏庫、并に寶光、蓮光等の六支院ありしが、明治維新の際、支院を本寺に併合し、高野山金剛峯寺に隸屬す。明治二十三年野村氏觀音堂を建て、大正十二年九月關東大震災に全焼し、寺寶古文書等多く灰燼に歸す。昭和二年本堂、地藏堂(子育地藏)、庫裡、觀音祠等を重建す。什貨中、絹本著色諸尊集會圖、同吉野曼荼羅圖(傳土佐吉光筆)、同彌勒曼荼羅圖、同天帝圖各一幅、同十六羅漢圖十六幅等は岡良に編せらる。

一 武州尾立郡大相模村大聖寺「天色(烏)玉懸結谷而相模」の不動尊は、草加の阪より北東の方疎里にあり、その路すじは、草加宿の先加茂(蒲生)とかやいえる立場の建石より、右の街道を入て一里あり、此途すじは、春は梅・桃・桜・さくら・梨花・連翹、夏の花を以てし、又処々の蓮池には紅白の色をまじえて咲し風情、又あるべしとも思はれざりき、于比辺に遊遊する者三度、中秋の末つかた桐島のおたの花のままたるも思はれざりき、可憐尊には秋の草々の花咲みたれし指は手に面白し、土地又一品なるものをぞや、花に吹風までぬくしなはたはたけ

禁制

- 一 山内之竹木不可伐取事
一 山林之内殺生堅不可致事
一 換替之屋敷者之者捕置可訴出事

右寛保四年より文化十福年にて、七拾余ヶ年に及べり、當寺の不動尊は相模の四大山不動の根本たることよつて、土地を大相模といひ、山号を真大山といふとしかや、

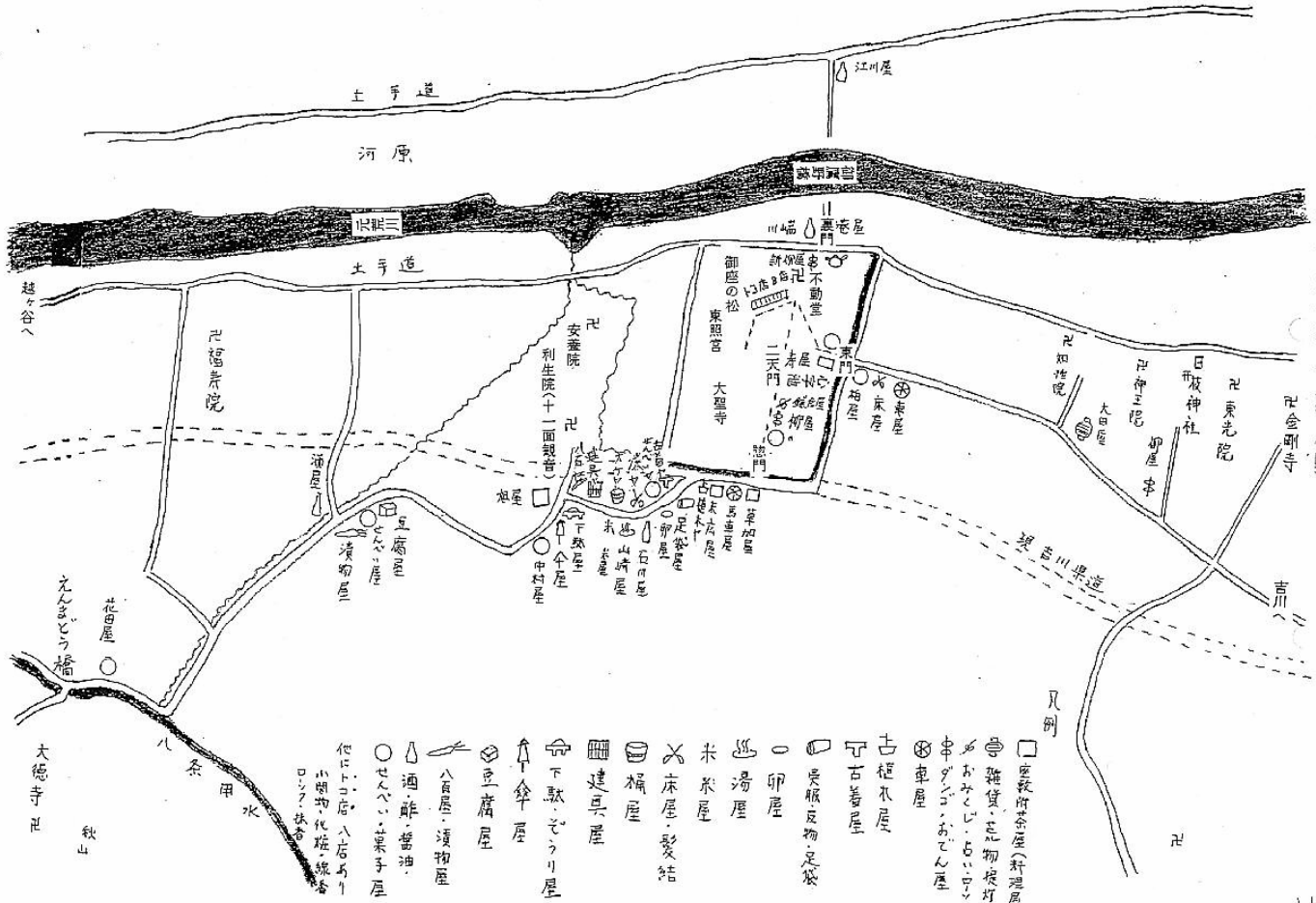
境内甚広く、南の仁王門より真北へ向て不動堂にいたる間凡武町、平坦の境内なれども門外よりの見込は、下流放田山よりは遠にまされり、惜しい哉、加茂よりは程里に遠く、又程が谷の駅よりは真門まで武拾町もありて、街道の綺麗ならねば、かゝる古跡の靈場も鄙鄙のを鄙しく、廿八日の外は拜参せずして、しむる人あるは恨みといふべし、

一 仁王門は往來の南門にありて、しかも標高く、形もは巧工を尽し、取分右の角より武本目の柱の上に牡丹をくわへし獅子の尊像、いかなる昔匠か作りしやらん、此門東西五間余、南北三間、上には真火山と稱し屋敷あり、筆者の名及び印なし、此門を過て矢太門門まで凡七町余、左りの方は僧坊は甚ぞつた、梁の外には出茶室の、此門を過て矢太門門まで凡七町余、右の方には店とかやいふもの、既(既)をさうして小間物類をはじめ、心々の前には廻廊にて見馴ぬ品々をならへかきさるも又めづらしく、頓て矢太門近き右の間に、掃地場あり、掃地堂あり、此あたりより境内次第に未広がりて奥深く、既に矢太門門は二重築の御門にて、上下に種あり、上なるは取法の築法にして、不動尊と書、下なるは左理即の築法を以て、其字に不動尊と認めたり、但し、武額ともた筆者の名印なきこそ恨みなれ、矢太門門大々東西五間余、南北三間、是より本堂まで武拾余間もあらん原、

右に鐘樓堂、在りにはもろくの天部の類、天神地祇の小社あり、又右手の方には酒樓・食店の家屋も五七軒見ゆ、又不動堂の北裏に門あり、これ越が谷の駅へ通じ、又東に門あり、是つるひじへの往還なりとぞ、且又、門前には旅店・商家等軒をならへて屋つときたる様、かゝる片断に此類ありて、例月廿八日は殊に賑はしく、都鄙の男女群集するは名實にして聖明き靈験もあるにこそ、

一 不動堂は八間四間、四方勾欄にして南面に作れり、正面の御厨子には、公の御故を彫彫にし、すべて内陣法殿の結構、首尾ともに満足し、又こゝろくの志願に依て、男女の尊を切て、いくつとなく納めたるあり、或は給馬をはじめ、いろ／＼の奇異、奉納の品は、堂内に移し置くを逐せり、此堂四方勾欄のまはり欄を設け、雨ふる日は参詣の諸人足を踏さず、夜更を過ぎしして、百度の心願を遂する様に作事せしは、成田山の不動堂にかはらず、且正面に阿彌殿を三三三にたしめし類は、朝鮮國某家の築にして、金印ありと見え、頗る大きき六尺ばかり、三尺三寸あるべし、且又古茶より奉納の絵馬若干ありて、文殊・般若・元和・寛永年間等あれば、年々し道場と見ゆ、

後下流成田村の不動は、中より不動尊にして、近年作事悉く成就し、本堂・鐘樓・燈臺・三重の塔・掃門・本地堂・奥の院・羅り堂をはじめ、別當新修寺の門・支門・坊舎は勿論、雲通り、石の玉蓮にいたるまで約かに首尾満足し、尊像・作事等に於ては、不動の第一といふべし、寺僧とては柳田相模守より五拾石を奉行するのみ也、今此大さがの大聖寺は、相州大山の本本として、六拾石の御朱印を賜ひぬるは、年代久しき不動堂にこそ、江戸より凡六里では遠し、



七怪火巨刹を焼く(明治二十八年)

明治二十八年八月 大相模大聖寺の火事

(八州第八号) 東京大学明治文庫蔵

南埼玉郡大相模村の大火事

大相模大聖寺の火災 大相模村大聖寺は真言宗新義派の檀林にして、昔し徳川政府の頃は百石の御朱印地にして境内も中々広くして数十の堂あり、其本堂の如きは銅葺にして八間四面の大伽藍なり、実に立派なものなり、搗て加へて同寺に安置し奉る不動尊は其昔(良弁僧都)が成田山新勝寺の仏像と同時に刻みしものにして、成田に劣らざる信仰者ありて日毎に参詣人の絶えざる程盛なる大寺なり、然れ共如何せん不動さんでも火事には打勝事出来ぬものと見へ、七月九日夜番僧がランプに燈火したる儘寝臥せしより是れが原因となりて、さしにも美麗なる大伽藍も見る間に火焰の中となり、其より延焼して鐘樓・太子堂・書院・庫裡・水屋・土蔵・納屋等十余ヶ所悉く烏有に帰したり、同夜折悪敷住職岡村庵善法師は社寺用の為め出京中なれども、幸ひにして有名なる不動尊と北条・足利・徳川時代の古書は皆取出したるとの事、信徒等は直に再建の事に着手せしも、成田山新勝寺に劣らざる程の評判ある大寺なれば、寄附の勧誘なきも続々寄附し来るとの事、この信徒にして此の不動の有難き事は如何計りなるべきか、古物保存国粹頭彰の豈夫れ山城大和にのみ限るべき物かは

●怪火巨刹を焼く(大聖寺火災の原因)

埼玉縣南埼玉郡大相模村真大山大聖寺は真言宗新義派の檀林にして同地方にては屈指の大伽藍なりしが去十日午前一時火災に罹り本堂は言ふに及ばず鐘樓・講堂・書院・庫裡・經藏等十一棟は悉く焼失し僅かに樓門と不動の松と叫べる名木のみ此災害を免かれたり同寺は享保年間再建に係り結構頗る華麗を極めたりしに一朝火災のため灰燼となりしは惜しみて尚餘りあり出火の原因は今に詳かならざれども爰に奇怪と云ふべきことは同夜の十二時頃ありしが大相模村駐在巡査大山由太郎と云へるが越谷警察署よりの歸途荒川堤と通過して纏て此大聖寺の裏路に差掛りしに供養塔の邊と覺しし所に最と怪し氣ある火焰の或は赤く或は青く燃出し居れるより巡査は不審しく思ひて暫時打見遣り居たる折柄吹來る風に件の火焰動き出て東の方へ進み行くにぞ今は早や猶豫からずと直ちに跡を追駆行き佩劍の抜手も見せず矢庭に之れに斬付けしに怪むべし火焰は俄かに飛行して凡三丁許り隔りたる墓地に至りて消失せたり巡査は最と不思議に思ひたれども今は目指す火焰も消失せられたれば其儀駐在所に立歸りて寢に就きたる間もかく忽ち同寺の出火となりたるか同夜は空も曇りて件の怪火を見し頃には雨さへ折々降り居りしとの事に聞く人奇異の思をなさざるなく同寺の火災も大方此怪火より發したるものなるべしなど評し居れどもソノナ理窟はわるまじ

大正三年三月 真大山大聖寺の観梅

(「埼玉新報」九日付 国立国会図書館蔵)

### 真大山の観梅

既報の如く南埼玉郡越ヶ谷在大相模村真大山境内の梅は今や盛りと咲揃ひ居るより、同山講中互親講にては去る五日講員三百六十余人、同日午前十時卅分浅草駅発特別臨時列車に搭し十一時越ヶ谷駅に着し本山に練り込みたるが、其順序は先頭楽隊にて次いで浅草芸妓十四名自動車にて乗り込みたるより、沿道之れが盛況を見んと人を以て埋められたり、かくして十一時四十分本山に乗り込みたる連中は各自充分の歓を尽し、午後一時よりは余興として剣舞及芸妓の手踊りあり、其間十善梅の前方にて記念撮影をなし又四時よりは本堂に於て大護摩の修行あり、同五時掃途に就きたるが当日雲集せし善男善女は約六七千にして頗る賑ひたり

▽特別観梅会 野口宝徳居士の発企にかゝる特別観梅会は六日開催せり、余興には浪花節あり、大師堂に於て正午より山主高岡師の法話あり、梅花の由来、梅花と信仰等に涉り熱誠なる話ありて夫より折詰弁当を

配付し、三時より護摩修行御札供物を配授して四時三十分頃より思ひくゞに退散せり

▽観梅囲着会 昨八日近郷近在の同好者は同山に於て観梅大会を開きたるが、出席者七十余名にして頗る盛会なりし

▽宝徳講の観梅 十日は宝徳講員八百余人の大観梅あり、開帳大護摩修行し御札供物并折詰瓶酒等配授し又種々の余興あり、管主高岡師の法話もある由、殊の外盛会ならん

▽観梅と大角力 東京護宝講員は十二日四百余人の大観梅団体にて同山に参詣、午前十一時開扉大護摩修行し正午より同講より奉納の東京尚武会の大角力あり(同会力士五十余名来山午後四時)とび入り自由にて景品は皆同講員携帯せらるゝことなれば一大盛観なるべし







明治二十年頃の大道寺鳥門

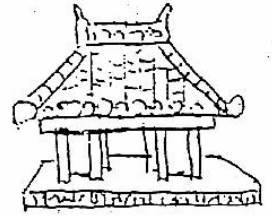
明治期、空想野郎でも早く洋画界に登場した画家に倉田自洋とその兄、弟次郎がいる。兄弟とも日本初洋画会会の重鎮渡井忠に師事す。弟次郎は明治二十年（一八八七）浦和師範学校高等科卒業後、組合立越ヶ谷高等小学校に勤め、明治二十四年渡井忠に面才を認められて上京するまでの四三回越ヶ谷地方の農村風景を描く。この水彩画は増林村榎本家に寄寓していた時の「大道寺の門」であるが、今度の「武州大相模界大山不動尊金堂」によって「大道寺講堂の鳥門」であることが判明した。



改装して下町の姿になった今の鳥門



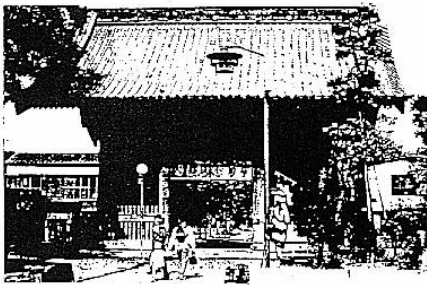
一七七四寛保四年頃の仁王門



一八三二文政六年頃の仁王門



一八八四明治十七年以降の鳥門



真大山大聖寺年譜

・この年譜は「武州大相模不動尊全系図」の検証を目的として作成  
 ・伝承および正誤に関係なく収録した  
 ・同一内容であっても関係資料は併記した

・大聖寺に関連する周辺の手柄も含めた  
 ・六供、末寺、門徒は旧の西方村、東方村にあり原資料通り別々に掲載した

・使用資料は私的判断で選択したので他に未使用資料がある  
 ・( ) の略称については末尾に原資料名を記載してある

七〇〇年頃 吉墳時代後期 この頃大相模耕地の「一本杉」周辺に人々が住む(見田方遺跡)

七五〇 天平勝宝二年 大相模不動坊創建と伝えられる(瑞像記)  
 本尊の不動明王は木像立像一尺七寸良弁権正作と伝えられる(寺有財産調)

七七八 神護景雲四年 僧良弁死す(八五歳)  
 梵鐘は延暦年間に鋳造し、後明和三年再鋳造(梵鐘銘・史伝)

八〇五 延暦年間 生不動と呼ばれた翁、荒川岸に庵を結ぶと伝えられる(瑞像記)

九〇一 延喜年間 真大山大不動坊開基(寺院台帳)  
 野与党(武蔵七党の一党)の一支族小相模次郎能高、大相模東方に定住(野与党系図)

九三九 天慶二年 「御座の松」植えられる(御座の松碑誌)  
 延慶二年 本尊不動明王は「家鳴不動」と呼ばれた(瑞像記)

一〇四〇 長久・寛徳年間 北条氏繁 大相模不動坊を祈願所とし諸役免除 不動院と改称  
 (北条氏繁提書・大聖寺蔵)

一〇四五 元龜三年二月九日 定伝(東光坊優婆塞の長男)紀州根来寺にて持法流授与される(縁起考略)

一五三二 天文年間 住持定伝 当山を秘密如願(密教寺院)とす(瑞像記)

一五七二 天正十一年 岩槻城主太田氏房 大相模不動坊に「三ヶ条の禁制」を発す(四角井家文書・大聖寺蔵書)

一五八三 天正十二年 徳川家康 江戸城に入る  
 天正十六年十一月 家康公 水田六拾石を寄進 寺号を大聖寺と命ず(瑞像記)

一五八四 天正十四年 大聖寺に六坊(六供)を置く(瑞像記)  
 家康公 止宿の禪り寺号を大聖寺 寺領六拾石および不入地の首の朱印を授く(寺院台帳)

一五八六 天正十四年 家康公 定伝を御召になり大聖寺領六拾石を御寄附 此節大聖寺の寺号を下す  
 権現様 御朱印状六拾石事(大聖寺寺領朱印状等) (大聖寺東照宮建立由緒書)

一五九〇 天正十八年八月一日 大聖寺 賜六拾石  
 内(東方村の分)  
 安養院 七石五斗  
 観音寺 四石二斗  
 翠王寺 四石二斗(八条領村誌)

一五九一 天正十九年 神ノ木村東漸院第六世定伝 東照宮御掃部依ありて天正十九年茶湯料として三石の  
 御朱印を賜う 因て是を中興と称す 此僧西方村大聖寺をも中興す(風土記)

一五九四 文禄三年 忍城主松平忠吉 新利根川を開発し利根川の主流を大日川筋に移とす(治水史、奥史)

一五九二 文禄年間 不動堂に文録の絵馬あり(風土記・遊歴雜記)

一五九五 慶長二年 住持定伝 京都醍醐寺にて密教の奥義を伝授される(瑞像記)

一五九七 慶長二年 住持定伝 京都醍醐寺にて密教の奥義を伝授される(瑞像記)

一六〇〇 慶長五年八月 任持定伝 醍醐三宝院大僧正より三寶院流許可(縁起考略)  
寛熙宮様 奥州從討 御給にて皇御の副松伏備大川戸に陣懸御殿を設ける  
(大川戸村杉浦家由緒書控)

慶長五年八月四日 東照宮様 小山より此海道を御掃陣の節 晩景大雨降りなれば御馬を在て  
当山に御一泊(縁起考略)

慶長五年 家康公 小山より舟陣の際暴風雨を避けて大聖寺に止泊 宝刀一振を奉納し  
任持定伝に戦勝祈願をさせる(瑞像記)

慶長五年八月五日 家康公 下野回小山より御掃陣の節大聖寺に御止泊 白鞘御太刀一腰御納  
後に京照宮建立し太刀を御神体とす(東照宮建立白鞘書)

慶長五年八月七日 家康 小山御陣を立つ 乙女川岸より舟にて西葛西に向かう(実紀)

慶長五年九月一日 家康 鎌倉八幡宮・鹿島大明神・浅草寺に怨敵退散御祈折壽同十七日浦願子定(実紀)

慶長五年九月十五日 大聖寺戦勝祈願の宝刀西へ倒れる(瑞像記)

慶長五年九月十五日 関ヶ原東軍勝つ(実紀)

慶長年間 荒川瓦首根溜井草堰創設 八条用水・四カ村用水過水(旧記)

慶長九年 不動堂に慶長の絵馬あり(遊曆雜記)

慶長十三年五月十九日 増林村の御茶屋御殿を越ヶ谷に移す(実紀)

慶長十八年九月 家康 越ヶ谷會田出羽氏に屋敷地一町歩を与える(伊奈備前藩派書)

慶長十八年九月 十月 家康 越ヶ谷陣符(実紀)

十二月 家康 越ヶ谷陣符(実紀)

慶長十八年 八条御排水路開発 後の西葛西用水路となる(旧記)

元和元年十一月 家康 越ヶ谷陣符(実紀)

元和 不動堂に元和の絵馬あり(遊曆雜記)

元和二年四月 家康死す 久能山に葬る

元和三年五月十一日 台徳院様御朱印状六拾石事(大聖寺朱印状写)

元和三年十一月 秀忠 越ヶ谷陣符(実紀)

元和四年十月 秀忠 越ヶ谷陣符(実紀)

元和六年十二月 秀忠 越ヶ谷陣符(実紀)

元和七年 赤堀川開通により利根川は古利根川となる(県史)

寛永( )の頃 不動堂の後に御鷹野橋として新方への通路あり(縁起考略)

寛永四年 御朱印高 六拾石 大聖寺領

御朱印地 三拾石 眞言宗大聖寺 持高 十九石二斗六供安養院 本寺 大聖寺末

御朱印配当高 七石 六供神王院 本寺 大聖寺末

御朱印配当高 七石 六供東光院 本寺 大聖寺末

御朱印配当高 七石 寺手不動院(村邊)

寛永六年十一月 秀忠 越ヶ谷陣符(実紀)

寛永六年 荒川瀬巻により古道は元荒川と呼ばれる(旧記)

寛永七年九月 草加宿成立し日光道完成(草加旧記)

寛永七年十一月 秀忠 越ヶ谷陣符(実紀)

寛永十三年十一月九日 大猷院様御朱印状 六拾石等(大聖寺朱印状写)

寛永十八年 新利根川過水：後に江戸川と呼ぶ(治水史)

寛永 不動堂に寛永の絵馬あり（遊曆雜記）  
 一六五七 明暦三年一月十八日 明暦の大火：江戸城御本丸、御天主等炎上、西本丸悉なし（武江年表）  
 一六五八 明暦三年二月七日 鎌谷御殿御引取 二ノ御丸エ立申（東京市史稿皇城編）  
 一六五九 明暦三年三月 越ヶ谷御殿 江戸城二の丸に移築（実記）

一六五八 万治年間 瓦葺根浦井より本所上水と八条御用水をひく（治水史）  
 一六六〇 寛文四年 瓦葺根石堰の残り石にて不動尊および照蓮院の手水石を作る（旧記）  
 一六六四 寛文三年七月十一日 巖有院様御朱印状六拾石事（大聖寺朱印状写）  
 一六六五 寛文三年七月十一日 巖有院様御朱印状六拾石事（大聖寺朱印状写）  
 一六六一 寛文年中 寺誌一卷撰寫（紛失）（瑞像記）  
 一六七二 東照宮および不動堂拝殿、仁三門建立の為大聖寺境内内の道一筋閉塞訴訟（旧記記載安養院文書）

一六七八 延宝六年六月一日 巖有院様御金拝願により東照宮を再建し寛容奉安す（東照宮建立由緒書）  
 延宝六年六月十七日 東照権現宮奉建立 御神体太刀にかわり御木像安置（貞二記）  
 延宝年中 常慈院様御寄附  
 御款付真鍮製香炉 一ケ  
 御款付真鍮製花瓶 一ケ  
 神酒 一対  
 三万 一対  
 戸張 一対  
 神燈 一組  
 供器真鍮製 一組  
 （由緒書抄）

一六八一 天和元年 親如法師 東照君祠を不動堂の南西に卜す（瑞像記）  
 天和元年六月二十五日 秋山利左衛門康任 瓦葺根村秋山家に生まれる（秋山氏由緒之記）  
 一六八五 貞享二年六月十一日 常慈院様御朱印状 六拾石事（大聖寺朱印状写）  
 一六九一 元禄四年十月 江戸湯島に靈鷲寺創建 綱吉より土地三千五百坪 柳沢吉保より金三百両 翌年朱印百石を給す（本郷区史）

一七〇六 宝永二年 山谷祖名主利左衛門 瓦葺根村より引越家作相統（旧記）  
 一七〇八 宝永五年三月二十日 大聖寺六俣の内安養院、薬王寺は古来嶋金剛寺（岩槻）門徒であったので 大聖寺門徒の内山谷村大徳寺を金子拾五両を添えて交換する（旧記）  
 一七一〇 宝永七年六月 秋山利左衛門康任三十歳 西方村山谷に分地位（秋山氏由緒之記）  
 一七一一 正徳五年 隆元 新に楼門を建て楼上に釈迦三尊像、十六羅漢像を安置、門の側に持国・多門の二天像を置く（瑞像記）  
 正徳五年 隆元 二天門および二天像、釈迦三尊、十六羅漢像、參籠所、講堂、食堂、方丈衆寮を造立（縁起略考）

一七一八 正徳五年十月五日 仁三門建立は正徳五年十月五日 右 門棟札に書記之有（旧記の追記：朱筆による）  
 一七二〇 享保三年七月十一日 有徳院様御朱印状 六拾石事（大聖寺朱印状写）  
 享保三年二月二十五日 埼玉郡大相模大聖寺焼亡（武江年表）  
 享保五年二月 講堂、房舎を焼失 不動堂、二天門は火災を免れる（瑞像記）  
 享保六年十月 御朱印地除地御札に付書上  
 武州八条領西方村 御朱印地 高六拾石 真言宗 大聖寺  
 此反別拾壹町三反四畝拾三歩  
 内 六町六反三畝九歩  
 四町七反畝四歩 畑方  
 右之外御除地 二町六反九畝九歩 寺中  
 此わけ 八反二畝拾歩 大聖寺  
 二反三畝六歩 神玉院  
 三反二畝三歩 利性院  
 四反五畝三歩 東光院  
 四反六畝廿歩 東方村安養院



地中六供観音寺 地中六供薬王寺  
 福壽院 正福院 知性院  
 玉蔵院

以上本末門徒共大聖寺分(寺院本末帳)

一七九七

寛政九年

大聖寺持川給の装は一通りの田給と違ひ余程大給に有之(旧記)

一八〇四

文化元年五月

「十方庵遊歴雜記」の著者釈大淨(津田敬順)越ヶ谷・大相模不動に遊ぶ(遊歴雜記)

文化元年十二月

文化三年

二十三世木食成円師 二王門なきは法に非ずと始めて瓦葺大徳門を建立(慈門修繕碑)

一八〇六

文化三年

「日光道中分間延絵圖」に大聖寺の挿圖掲載

一八〇九

文化六年

西方大聖寺御朱印六拾石の内六供への分高(東方村分)  
 安楽院 御朱印七石五斗 除地境内 二反五畝二十步  
 観音寺 御朱印四石二斗 除地境内 二反六畝二十步  
 普門寺 御朱印四石二斗 除地境内 二反八畝二十步  
 玉蔵院 境内除地 一反八畝  
 (西袋村小沢家文書、八条領石高反別石盛手控)

一八一四

文化十一年中秋

門前に寛保四年の制札建つ  
 仁王門は東西五間、南北二間  
 矢大臣門は二重家根接門、東西五間、南北二間  
 不動堂は八間四面、四方勾欄  
 右手に振離場、鐘樓あり  
 末寺六院ありて、段々嶺上に次第して當寺を住職する(遊歴雜記)

一八一六

文化十三年五月

釈大淨(津田敬順)越ヶ谷・大相模不動、筑比地(松伏)に遊ぶ(遊歴雜記)

一八二二

文政四年五月下旬

大相模不動草の七日間の雨乞い祈禱(旧記)

一八二二

文政五年

大聖寺(四方村分)  
 安樂院、福壽院、知性院、正福寺は大聖寺末  
 修験者東光院は幸手領堤根村不動院配下(旧記、西方村地誌類書上帳)  
 高礼場は村中にて越ヶ谷より二郷半鐘へ往末端不動尊東門前に御座候  
 (旧記、地誌類調に付御書上真外家感感岳々承置事)

一八二三

文政六年頃

文政十一年刊行「新編武蔵風土記稿 埼玉郡之七」より  
 西方村 大聖寺境内  
 不動堂、仁王門(門外に寛保四年の制札立つ)二天門(持国、毘沙門の二像安置)真大山の額あり、應堂、鐘樓(明和三年造)  
 石社、弁天社、富御宮(昔は太刀、延宝六年より御木像)、天神社、愛宕社、別当大聖寺新築真言宗、太子堂、地藏堂  
 蓋定伝後櫓木村東漸院に隣接、塔中、利生院本尊十一面観音  
 ○大聖寺末寺、安樂院本尊大日、福壽院本尊薬師  
 ○大聖寺門徒、知性院本尊阿弥陀、正福院本尊薬師  
 東方村 安樂院本尊阿弥陀、薬王寺本尊薬師、観音寺本尊観音、玉蔵院本尊阿弥陀  
 以上四カ寺共大聖寺末(以下略)

一八二五

文政八年三月

「旧記」入用に付問合せ  
 一、天正十三、十四年の頃権現様八条領、新方領、岩槻領に御座候所  
 御座候哉、又この頃權現又八郎と申御供御座候哉  
 天正十九の頃村越及助殿并會阿弥と申御石仕御座候哉  
 家康、秀忠様の下野発向は長長何年か  
 開ヶ原越起は慶長五年の何月時分の事か(以下略)  
 (年不詳何番)(大聖寺蔵書)

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分

一八二九

文政十二年

文政十二年御改革に付八条領商人願  
 西方形の分



一八九五

明治二十八年  
七月九日

大相模不動尊寺の火災  
不動堂、鐘樓、太子堂、書院、庫裡、水屋、土蔵、納屋等十カ所を焼く  
本尊と北条、足利、徳川時代の古文書は取出す(「八州第八号」東大明治文庫蔵)

明治二十八年七月九日  
午前一時 怪火巨利を焼く。大聖寺火災の原因(明28・7・18日報知新聞)

明治二十八年七月  
本堂、輪蔵(経蔵)、講堂、書院、庫裏の数棟焼失(寺有財産調)

明治二十八年七月  
御座の松は火災を免れる(御座の松銘碑)

明治二十八年七月  
火災を免れた建物は惣門、東門、滝ノ坊、黒門と惣門西側の庫裡(史、伝)

明治二十八年七月  
仮本堂を建てる(寺有財産調)

明治二十九年  
東寺安養院を移築して講堂、四條の妙音院を購入して大師堂を建てる(寺有財産調)

明治三十年九月  
「互任連」の句碑を建つ

明治三十二年七月  
東武鉄道北千住〜久喜間開通 大相模不動尊参詣人は越ヶ谷駅(後の武州大沢駅  
現在北越谷駅)および同十二月開設の沼生駅(現南越谷付近)を利用

明治卅五年九月  
大房(現北越谷)浄光寺周辺に「越ヶ谷古梅園」を開園す(浄光寺境内古梅園記念碑)

明治卅六年七月  
住持高岡隆円僧正 本尊の「仰詠歌」を作詞(越谷市史)

明治卅七年二月  
真大山中興第一世高岡隆円師の「御座の松の歌碑」建立

明治卅七年七月  
大聖寺山内は参道両側に桜並木 惣門西側に梅園 池には鯉魚そして鱒、螢の  
名所(明37・2・10東武新報)

明治卅七年四月  
西方大聖寺に於て日露戦役戦勝祈願が執行される(越谷市史)

明治卅七年七月  
「御座の松の碑」建立  
西方大聖寺に於て日露戦役戦勝祈願が執行される(越谷市史)

明治卅九年十一月  
住持高岡隆円師 日露戦役記念樹として樹齢百五十年の「名譽の藤」を植える  
(大2・4・25国民新聞)

明治四十年二月  
高岡隆円僧正「真大山梅園」を惣門西側に作る(明41・3・11関東新報)

明治四十年九月  
「降魔松」碑建立

明治四十年十二月  
大聖寺境内「真大山梅園」に金野谷村(吉川市)の高崎兵吾氏は樹回四尺六寸  
樹齡二百五拾年の梅木を奉納し「千代の梅」と命名す(明41・3・11関東新報)

明治四十二年七月  
真大山不動尊春秋大会式に付東武鉄道会社は二割引往復切符を発売する

明治四十二年七月  
なお伝導部より四師采山し惣門壇上にて伝導大演説の後審音器の余興あり  
(明41・2・21関東新報)

明治四十二年七月  
真大山の大願摩に数千人の参詣者あり 五師(僧正)による伝導大演説会を  
滝の坊にて開く 余興に審音器、芝居等あり(明41・4・21関東新報)

明治四十二年七月  
大相模不動尊春秋大会式には東武鉄道は兩國橋、裕隆間往復二割引切符発売  
東京松栄講は数百人の団体参拝、例年通り飛入り角力 伝導大演説会を開催する  
(明41・8・21関東新報)

明治四十二年七月  
大相模不動尊わきの山崎屋のスシ旨く 客扱いも親切だ(明41・6・1関東新報)

明治四十三年六月  
元荒川出水につき不動堂裏の百虎申の石仏を防水堤に使用する…回収後東門  
参道両側に並べる(史、伝)

明治四十四年六月  
福寿防の大聖寺への合併認可される(寺有財産調)

明治四十四年六月  
大相模不動尊大会式に東武鉄道会社は浅草より割引往復列車を運転させる  
(明44・8・13国民新聞)

明治四十四年六月  
大相模不動尊は羽東希有の老梅樹を植えて梅園らしくなつた(明45・2・15関東新報)

明治四十四年六月  
真大山大聖寺では樹周「一丈五尺」の名樹を得て「十番の梅」と名づけ廿八日に  
大会式を挙げる(明45・2・25国民新聞)

明治四十四年六月  
大聖寺住持高岡隆円師は樹周「一丈五尺」の「十番の梅」を得て大会式を挙げる  
(明45・2・25国民新聞)

明治四十四年六月  
大聖寺住持高岡隆円師は樹周「一丈五尺」の「十番の梅」を得て大会式を挙げる  
(明45・2・25国民新聞)

明治四十四年六月  
大聖寺住持高岡隆円師は樹周「一丈五尺」の「十番の梅」を得て大会式を挙げる  
(明45・2・25国民新聞)

明治四十四年六月  
大聖寺住持高岡隆円師は樹周「一丈五尺」の「十番の梅」を得て大会式を挙げる  
(明45・2・25国民新聞)

明治四十四年六月  
大聖寺住持高岡隆円師は樹周「一丈五尺」の「十番の梅」を得て大会式を挙げる  
(明45・2・25国民新聞)

明治四十四年六月  
大聖寺住持高岡隆円師は樹周「一丈五尺」の「十番の梅」を得て大会式を挙げる  
(明45・2・25国民新聞)

明治四十四年六月  
大聖寺住持高岡隆円師は樹周「一丈五尺」の「十番の梅」を得て大会式を挙げる  
(明45・2・25国民新聞)

明治四十四年六月  
大聖寺住持高岡隆円師は樹周「一丈五尺」の「十番の梅」を得て大会式を挙げる  
(明45・2・25国民新聞)



明治四十五年三月廿三日  
真大山大聖寺では、高一丈五尺の名樹を得て「十善の梅」と名づけ廿八日に  
大会式を挙げる(明治45・2・25國民新聞)

明治四十五年三月廿六日  
大聖寺持高閣隆円師は樹高一丈五尺の「十善の梅」を得て大会式を挙げる  
(明治45・2・25國民新聞)  
真大山の「名譽の藤」「御座の松」「十善の梅」の写真三点を聖上陛下へ献上す  
(大2・4・25國民新聞)

大正二年三月十九日  
大相模真大山には「十善の梅」と称する幹廻り一丈三尺、樹齡七百年の古木あり  
(大2・2・18國民新聞)  
大正元年留三善  
真大山大聖寺の日露戦役記念樹「名譽の松」は百五十年を経た大樹で十間四方の  
棚に咲く花の長さは二尺五寸なり  
(大2・4・24國民新聞)

大正二年五月四日  
真大山大聖寺「名譽の藤」の開花期には東京の各講中、学生、酒商組合、花業  
化粧品組合、浅草公園大正会員各待合の団体が繰り込む(大2・4・25國民新聞)  
大正三年二月五日  
東京真大山互親勝中三百六十人は浅草築特別臨時列車にて越ヶ谷駅(現北越谷駅)  
着、先頭は奉陪、次いで浅草芸妓十四名自動車にて真大山の観梅に訪れる。雲集  
せし善男善女六、七千人(大3・3・9埼玉新報)

大正三年二月六日  
真大山特別観梅会を催す。会興、山王高岡師の法話、折詰弁当、護摩修行、  
御礼供物の配授等あり(大3・3・9埼玉新報)

大正三年三月八日  
真大山観梅園春会にて七拾名参加(大3・3・9埼玉新報)  
大正三年三月十日  
空徳齋員八百余人の大観梅は開扉大護摩修行、御礼供物、折詰瓶灌配授、  
管主法話、余興等あり(大3・3・9埼玉新報)

大正三年三月十二日  
東京護摩齋員四百余人の大観梅は開扉大護摩修行、東京尚武会力士五拾余名  
による大角力の奉納あり(大3・3・9埼玉新報)

大正三年三月廿六日  
真大山の「御座の松」は延宝三年(一六七五)に植えし赤松高さ一丈三尺、  
幹廻り八尺余、枝東四十一間、南北十六間なり。大正元年今上陛下に此写真献上  
(大3・8・21國民新聞)  
大相模不動春秋大会式には東武鉄道は二割引き、花角力あり。

大正三年九月四日  
千葉地方より名物梨子商人露天で販わう(大3・8・28國民新聞)  
大正三年十一月  
東陽寺を移転し大師堂を再建する(寺有財産調)

大正四年五月十三日  
真大山境内の「名譽の藤」と高頂五百余種開花す。組合寺院連、学友会百五拾名の  
観勝会あり(大4・5・8國民新聞)  
大正五年三月廿六日  
文学者大町桂月越ヶ谷梅園觀梅の後大相模不寧尊に詣でる。仮本堂、山門とその  
西側の梅園、一丈三尺の「十善の梅」、十間四方の藤棚、東西十一間南北十六間の  
老松(御座の松)を見物(越谷市史)

大正五年三月  
真大山海園の景観  
「十善の梅」幹廻り一丈三尺、樹齡七百年  
「四恩の梅」幹廻り一丈二尺、樹齡五百年  
「千代梅」幹廻り四尺六寸、樹齡二百五十年  
このほか心月梅、祥光梅、得單梅、加持梅、和楽梅、飛龍梅、三光梅、不老梅、  
東照梅等あり(大5・3・越ヶ谷案内)他)

大正六年五月十八日  
安養院合併認可(寺有財産調)  
大正七年  
安養院本堂を移転し講堂を再建す(寺有財産調)  
大正七年  
塔中利性庵を移転し庫裡とす(寺有財産調)

大正十年九月  
大聖寺の仏像  
本尊 不動明三 木像 立像 一尺七寸 天保十三年  
不動明三 木像 立像 一尺七寸 貞弁作  
不動明王 木像 立像 一尺七寸 不詳  
元安養院(元福寿院) 不動明王 木像 立像 一尺四寸 不詳  
大日如來 木像 坐像 三尺五寸 不詳  
釈迦如來 木像 坐像 三尺七寸 不詳

大正十一年十月  
本堂再建計画  
十間四方設計図保存されている  
大きな  
宮大工 佐渡島明石近藤氏に依頼(史、伝)

一九二二  
大正十一年十月  
本堂再建計画  
十間四方設計図保存されている  
大きな  
宮大工 佐渡島明石近藤氏に依頼(史、伝)



- (差添書) 慶長十三年五月十九日 伊那備前差添書 越ヶ谷本町 小島家蔵
- (縁起考略) 享保十二年十二月 真大山縁起考略 大聖寺蔵
- (瑞像記) 享保十四年中秋 武州大相模不動明王瑞像記 大聖寺蔵
- (東照宮由緒書) 寛政七年十二月 大聖寺東照宮建立由緒書 大聖寺蔵
- (寺院本末帳) 寛政七年 江戸幕府寺院本末帳集成 雄山閣出版
- (遊歴雜記) 文政十二年 釈敬順十方庵遊歴雜記 東洋文庫 平凡社
- (風土記) 文政十一年 新編武蔵風土記稿 大日本地誌大系 雄山閣
- (村鑑) 天保六年八月 八条領村鑑 西袋村(八潮市) 小沢家文書No.97
- (旧記) 天保十年頃 西方村旧記 越谷市立図書館蔵
- (武江年表) 嘉永元年十一月 武江年表 東洋文庫
- (由緒書) 安政三年二月 西方大聖寺由緒書 大聖寺蔵
- (王亀講) 慶応二年 大相模真大山王亀講姓名記 岩槻市史 新井家文書
- (秋山氏由緒) 明治初 秋山氏由緒之記 越谷市史 西方秋山家文書
- (郡村誌) 明治八年六月 武蔵野国郡村誌
- (惣門碑) 明治二十一年四月 惣門修繕碑
- (御座の松碑) 明治三十七年八月 御座の松碑
- (寺有財産) 大正十年九月 大聖寺寺有財産調 大聖寺蔵
- (寺院台帳) 昭和十五年十一月六日 大聖寺寺院台帳 大聖寺蔵
- (治水史) 昭和十八年七月 利根川治水史 官界公論社
- (史、伝) 昭和三十四年 越谷市の史跡と伝説 越谷市教育委員会
- (見田方遺跡) 昭和四十六年三月 見田方遺跡発掘報告書 越谷市教育委員会
- (伺書) 年不詳 大聖寺伺書 大聖寺蔵
- (実紀) 徳川実紀 国史大系 吉川弘文館
- (八州) 八州 東京大学明治文庫
- (埼玉新報) 埼玉新報 国立国会図書館蔵
- (関東新報) 関東新報 国立国会図書館蔵
- (県史) 新編埼玉県史 埼玉県
- (八潮市史) 昭和六十二年一月二十八日 八潮市史 史料編 近世II
- (越谷市史) 越谷市史 史料編I~III 統資料編(一)~(三)

此時 平成十年九月

大聖寺年譜作成者 高崎 力